



金沢大学と北國新聞社が連携して取り組む市民公開講座「金沢学」の2021年度事業は、上半期に5講座を開講しました。金沢の伝統工芸、ゆかりの偉人のほか、方言や音楽、災害の歴史まで、それぞれの専門家が解説しました。

主催／金沢学推進プロジェクト(国立大学法人金沢大学、北國新聞社)

## 4月 O E K、そして風と緑の楽都 音楽祭は市民権を得たか？

【講師】山田正幸氏 (いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭総合プロデューサー)

オーケストラ・アンサンブル金沢(OEK)は33年前に設立され、初代監督には指揮者の岩城宏之氏が就き、15年から石川独自の「いし

### 評判高め市民の誇りに

ました。子どもの頃に金沢に疎開し、伝統文化の奥深さを体感していた岩城氏は「この地で中途半端な楽団



をつくってはだめだ」と実力主義にこだわりました。オーケストラ・アンサンブル金沢(OEK)は33年前に設立され、初代監督には指揮者の岩城宏之氏が就き、15年から石川独自の「いし

## 5月 金沢方言の今と昔 現代方言と鈴木大拙の金沢訛り

【講師】新田哲夫氏(金沢大学教授)

かつて明治45年生まれの女性から金沢方言を教わりました。八百屋を営んでいたその女性は、地の物を指す「じわもん」の意味は本来「売り物にならない訳あり品」「自分の家で消費すべきもの」であると教えてく

### 古い方言音消えかかる

れました。じわもんは「自家消費のもの」から「常に食べる物」「我が家の味」の意味でも使われるようになりました。さらに「じのもの(地の物)」と音が似ているので、混同して使われるようになってきたと考えられます。



# 城下町の歩み、つぎつぎに感じ

## 市民公開講座 金沢学 2021年度〈上〉

### 6月 作家の工芸く金沢を中心く

【講師】唐澤昌宏氏(国立工芸館館長)

縄文時代から約1万4千年の間、工芸は職人による「手作り産業」でしたが、次第に作り手の美意識による作品の創造が始まり、第2次世界大戦後に活発になりました。現在、工芸は、技術などを伝承して大量生産品を製作する「職人の工芸」と、伝統を意識しながら個性や表現を重視した作品を制作する「作家の工芸」に分類できます。両方があるからこそ、日本にさまざまな工芸が息づいていると言えるでしょう。



### 7月 豪雪、豪雨、そして地震 く金沢の自然災害と防災を考える

【講師】宮島昌克氏(金沢大学教授)



防災に重要なのは平時からの想像力です。地元や他の地域で起きた過去の災害を知り、経験したことのない災害を考えておく必要があります。

想像力で災害に備える。災害が起きるのは、自然の力が社会の抵抗強度を上回るときです。そして自然の力と社会の強度は常に変化しており、以前とは違う災害が起きます。2018年の豪雪は、二八豪雪、五六豪雪と比べて降雪量が少なかったものの、奥能登に断水が頻発しました。これは

### 9月 高峰譲吉と渋沢栄一 く譲吉を支えた二人の交友

【講師】増山仁氏(金沢ふるさと偉人館副館長)

金沢育ちの世界的化学者高峰譲吉と、日本資本主義の父、渋沢栄一の交流は近代日本の発展に大きな功績を残しました。

その始まりは1886年。人造肥料に可能性を見いだした高峰が会社の創設を志し、年齢が一回り上の渋沢を頼ったのがきっかけでした。一時、疎遠になりましたが、高峰の存在が大きい、頼りにした証でしたが、高峰が消化酵素「タカジスターゼ」、止血剤「アドレナリン」を世に送り出した後、再び深まってい



## 想像力で災害に備える

## 親交が日本発展に寄与

## 伝統工芸に偏らず展示

## 親交が日本発展に寄与